

令和5年度 長野県公立高等学校入学者選抜学力検査の結果について

学びの改革支援課

1 受検者数 ()内は前年度比較

- ・ 受検者総数 9,891人(-227人)
- ・ 全日制 9,659人(-249人)、定時制 140人(+12人)、多部制 92人(-40人)

2 教科別結果

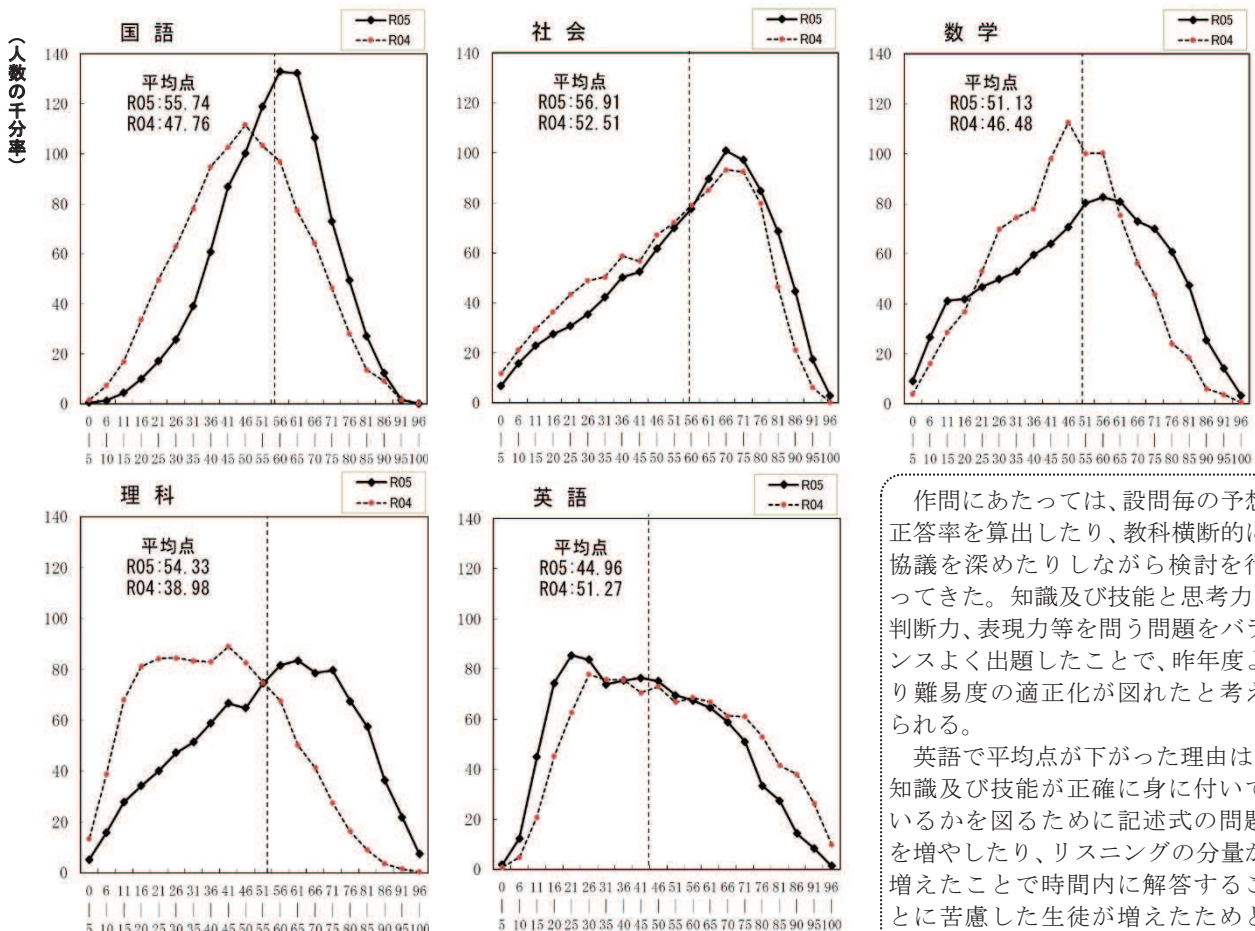
()内は前年度数値と増減

	国語	社会	数学	理科	英語
平均点	55.7 (47.8, +7.9)	56.9 (52.5, +4.4)	51.1 (46.5, +4.6)	54.3 (39.0, +15.3)	45.0 (51.3, -6.3)
100点の人数	0 (2)	1 (1)	7 (0)	23 (0)	2 (14)
0点の人数	0 (4)	9 (17)	5 (5)	4 (16)	1 (0)
標準偏差*1	15.2 (17.2)	21.5 (21.7)	22.4 (18.2)	22.0 (19.2)	20.9 (22.0)
変動係数*2	0.27 (0.36)	0.38 (0.41)	0.44 (0.39)	0.41 (0.49)	0.46 (0.43)

*1:数値の分布の散らばり具合(ばらつき)を表すもの。標準偏差が大きいと、平均値のまわりの数値の分布の散らばりが大きい。

*2:平均値に対して標準偏差がどの程度の比率になるかを示すために、標準偏差を平均値で割ったもの。平均値が異なっても散らばり具合を比較できるように補正した値。格差が拡大すると変動係数が上昇し、格差が縮まると変動係数は下降する。

3 教科別得点分布グラフ



作問にあたっては、設問毎の予想正答率を算出したり、教科横断的に協議を深めたりしながら検討を行ってきた。知識及び技能と思考力、判断力、表現力等を問う問題をバランスよく出題したことで、昨年度より難易度の適正化が図れたと考えられる。

英語で平均点が下がった理由は、知識及び技能が正確に身に付いているかを図るために記述式の問題を増やしたり、リスニングの分量が増えたことで時間内に解答することに苦慮した生徒が増えたためと考えられる。

4 結果の考察と授業改善に向けた取組

- 今回出題した問題の中から、複数の資料を比較し関連付けながら事実を基に課題を見出す力や、課題解決に向けた取組を考察し、妥当性や効果、実現可能性等についての自分の考えを説明、記述する力をみた社会の問題（問3Ⅱ(3)）について、結果を考察した。

【問題（抜粋）】 資料から読み取れることを手がかりにして、火山の活動が活発な日本では、地下にある高温の熱水や蒸気を資源として利用する、地熱発電を増やすことがよいのではないかと考えた。地熱発電を増やすことがよいと考えられる理由と、地熱発電を増やすうえでの課題について考察し、表現しなさい。

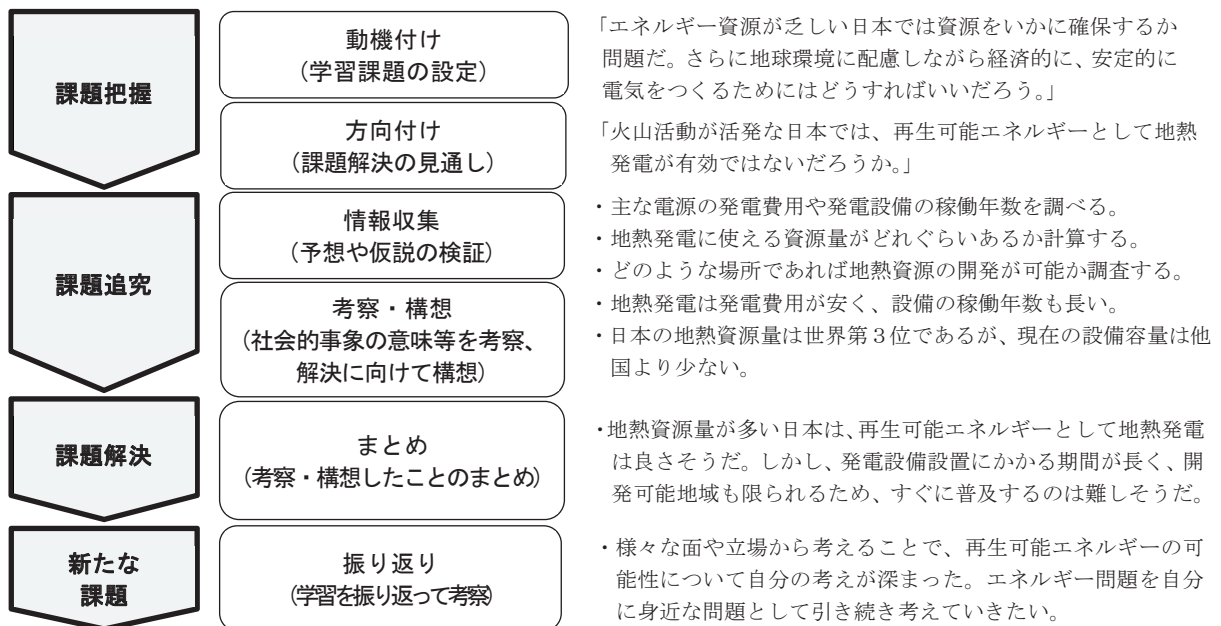
[考察] ・33%の受検者が正答であり、前年度に出題した同様の力を見る問題の正答率とほぼ同じであった。「理由」と「課題」を同じ資料から多面的・多角的に考察して自分の考えを表現していく力をはかる問題であったが、依然として課題があると言える。一方、完全な無答は約10%であり、昨年度の約14%から若干の向上が見られた。引き続きこのような力が身に付くよう、ICT等も効果的に活用しながら学びを充実させていくことが大切である。

[授業改善に向けて]

日常の社会生活との関連を大切にした課題解決型の学習を

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善によって、社会的事象に関する課題を明確にし、様々な考えに触れながら見通しをもって追究できる単元を構想したい。

【探究的な学習展開の例】



5 学力検査問題に対する外部評価者・中学校からのご意見

[成果]

- ・知識偏重ではなく、資料を深く読み取り、そこから思考力や判断力を問う問題が多く、新しい学力観に基づいた問題が工夫されている。
- ・身近な題材をもとにした問題が多く出題され、実生活場面での活用について考察する良問が多かった。

[課題]

- ・説明のための文章が多く、読解に苦慮する受検生が多数いたように推測される。

6 今後の対応について

- ・育成を目指す資質・能力を適切に評価できる問題となるよう、問題数、文字数等のバランスに一層配慮しながら、引き続き工夫する。
- ・生徒が抱く問いを基に、考えたことを表現し対話を繰り返しながら追究していく学びを進める。